

【A年】降誕前第6主日(2024年11月17日)

【旧約聖書日課】申命記 18章15～22節

15あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。16このことはすべて、あなたがホレブで、集会の日に、「二度とわたしの神、主の声を聞き、この大なる火を見て、死ぬことのないようにしてください」とあなたに求めたことによっている。17主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもつともである。18わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。19彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。20ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」21あなたは心の中で、「どうして我々は、その言葉が主の語られた言葉ではないということを知りうるだろうか」と言うであろう。22その預言者が主の御名によって語っても、そのことが起こらず、実現しなければ、それは主が語られたものではない。預言者が勝手に語ったのであるから、恐れることはない。

【使徒書日課】使徒言行録 3章11～26節

11さて、その男がベトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。12これを見たベトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。13アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。14聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。15あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。16あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くなりました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。17ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、

指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。18しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。19だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。20こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださいなのです。21このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。22モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。23この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』24預言者は皆、サムエルをはじめその後には預言した者も、今の時について告げています。25あなたがたは預言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と、神はアブラハムに言われました。26それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださいました。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。」

【福音書日課】マタイによる福音書 5章38～48節

38「あなたがたも聞いておおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。39しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。40あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。41だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。42求める者には与えなさい。あなたがたに借りようとする者に、背を向けてはならない。」

43「あなたがたも聞いておおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 18章15～22節

15あなたの神、主は、あなたの中から、あなたの同胞の中から、私のような預言者をあなたのために立てられる。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。16これは、あなたがたが集会の日にホレブで、あなたの神、主に「私が死ぬことがないよう、私の神、主の声を二度と聞かず、また、この大いなる火を再び見ることはないようにしてください」と言って求めたことによるものである。17その時、主は私に言われた。「彼らの言うことはもっともである。18私は彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立て、その口に私の言葉を授ける。彼は私が命じるすべてのことを彼らに告げる。19彼が私の名によって語る私の言葉に聞き従わない者がいれば、私はその責任を追及する。20ただし、預言者が高慢にも、私の命じていないことを私の名によって語ったり、他の神々の名によって語ったりするならば、その預言者は死なねばならない。」21もしあなたが心の中で、「私たちは、その言葉が主の語られた言葉ではないことを、どのように知りえようか」と考える場合、22その預言者が主の名によって語っていても、その言葉が起こらず、実現しないならば、それは主が語られた言葉ではない。預言者が傲慢さのゆえに語ったもので、恐れることはない。

使徒言行録 3章11～26節

11さて、その男がベトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ駆け寄って来た。12これを見たベトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、私たちがまるで自分の力や敬虔さによって、この人を歩かせたかのように、なぜ、私たちを見つめるのですか。13アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、私たちの先祖の神は、その僕(別訳→子)イエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めていたのに、その前でこの方を拒みました。14聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。15あなたがたは、命の導き手を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。私たちは、そのことの証人です。16そして、このイエスの名が、その名を冠した信仰のゆえに、あなたがたの見て知っているこの人を強くしました。その名による信仰(別訳→イエスによる信仰)が、あなたがた一同の前でこの人を完全に癒したのです。

17ところで、きょうだいたち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のため

であったと、私には分かっています。18しかし、神は、すべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。19だから、自分の罪が拭い去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。20こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために定めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。21このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなる時まで、天にとどまることになっています。22モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞(直訳→兄弟たち)の中から、私のような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。23この預言者に聞き従わない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』24預言者は皆、サムエルをはじめその後には預言した者も、この日について告げています。25あなたがたは預言者の子であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。神はアブラハムに、『地上のすべての氏族は、あなたの子孫によって祝福される』と言われました。26それで、神はご自分の僕(別訳→子)を復活させ、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。それは、この方があなたがたを祝福して、一人ひとりを悪から離れさせるためでした。」

マタイによる福音書 5章38～48節

38「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と言われている。39しかし、私は言うておく。悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。40あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着も与えなさい。41あなたを徴用して一ミリオン行けと命じる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。42求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」

43「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われている。44しかし、私は言うておく。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。45天におられるあなたがたの父の子となるためである。父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47あなたがたが自分のきょうだいにだけ挨拶したところで、どれだけ優れたことをしたことになるか。異邦人でも、同じことをしているではないか。48だから、あなたがたは、天の父が完全であられるように、完全な者となりなさい。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月17日「降誕前第6主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。伝統的な教会暦では「終末前主日」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、「預言者」に関する指示を告げる箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、聖霊降臨後の弟子たちが神殿境内で足の不自由な人を癒した後に人々に証言をしたことを物語る箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、山上の説教中で復讐や隣人愛に就いての教えの解釈を説かれた箇所。

旧約日課(申命記 18章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第五巻で、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。全34章中、28章までは、死期を自覚したモーセがエジプトから導いてきた民に対してこれまでの歩みを振り返り、主から授けられた「律法」の意義を教えつつ、その内容を再確認する、という「訣別説教」の体裁になっている。29章以下には、「モアブ契約」、「後継者ヨシュアの任命記事」、「モーセ辞世の句と祝福」、そして「モーセの死の記事」が収められている。日課箇所は、「訣別説教」中で再確認される「律法」の一項目。

・「申命記」の「訣別説教」中に置かれた「律法再録」の内容は、定住生活後の社会秩序を基礎づける諸規範となっているが、モーセ～ヨシュアの時代設定では想定されていない王国時代を前提とした内容も含まれており、しばしば、これらは事後的に「モーセの律法」に追加された事項だとみなされてきた。他方で、伝統的には、「律法再録」部分を中心とした「原申命記」なるものが、「列王記下」22章が物語るヨシヤ王時代に神殿で見いだされた「律法の書」に相当するものとも解されてきた。ヨシヤ王はこの見つけ出された古い「律法の書」に基づいて諸改革を断行したとされるが、「列王記」は、これら一連の動きにおいて書記官シャファンと大祭司ヒルキヤが主導的な役割を果たしていた、ということを示唆している。つまり、「律法の書」を王に提示するにあたって、当時の状況で企図されていた改革を基礎づけることができる内容に改変されるか、あるいは再解釈された可能性が大いにある。「申命記」の原型は、そのようにして、モーセの時代よりも600年も後の王政を基礎づけるための文書として表舞台に示されるようになったものとみなすことができるかもしれない。

・日課箇所では、「預言者」に関する「教え」が示されている。王国史において、「預言者」の実体は多様であったと考えられるが、「エリヤ」のような古典的伝説的預言者を除くと、旧約正典中の「預言者」は、原則として「宮廷預言者」として王に仕える助言者を指していると考えられる。南王国ユダで「宮廷預言者」の役

割が重要な意味を持つようになったのは、前8世紀末に北王国イスラエルが滅亡した時代以降であったと考えられる。それ以前にも、「アモス」のような祭司ではない人物が王の命により「預言者」活動をしていたと考えられるが、北王国が滅んでいく時期に登場した「イザヤ」以降、「宮廷預言者」はもっぱら祭司集団出身者によって占められていくことになった(エレミヤ、エゼキエルなど)。北王国では、「エリシャ」の時代以降、宮廷に地方聖所祭司集団出身者が「宮廷預言者」として参画し、王の統治や宮廷政治に影響力を行使していたと考えられる。彼らは、北王国が崩壊していく過程で、政治的影響力を行使する場を、北王国サマリア宮廷から、南王国エルサレム宮廷にシフトしていったのであろう。南王国(ユダ)も、それを歓迎した節がある。それは、元来王立神殿として王のコントロール下にあったエルサレム神殿の祭司集団にも影響を及ぼし、王の「御用祭司」としてではない、一定の自律性を確保した祭司集団として振舞う道筋を立てることになったと推認される。それは、エルサレム神殿祭司集団の立場からは、旧イスラエル王国領域の地方聖所祭司集団を、エルサレム宮廷に影響力を行使するライバルとして認識するようになったことでもあつただろう。そうであれば、相互の牽制として、「宮廷預言者」を制度的に基礎づけると共に、その適性を判断する基準も設ける必要があつたと考えられる。日課箇所は、そのような背景を推認させるものである。

使徒書日課(使徒 3章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻とされる「初代教会正史」を扱う歴史物語文書。主イエスを直接知る「使徒」の時代が終わった紀元70年代以降、「使徒」の伝えた主イエスの教えと生涯を固定化するために文書化することが求められ、多くの「福音書」が編まれた。それに加えて、主イエスから直接教えを受けた「使徒たち」が目指した「教会」のあり方を共通認識としようとする試みが1世紀末頃から積極的に展開されたと考えられている。最終的に2世紀以降の主流キリスト教会が自分たちの歴史的基礎づけ(ルーツ)を物語るものとして共有することになったものが、「新約」正典に含まれる諸文書となった。「使徒言行録」は、その意味で、客観的な歴史書ではなく「正史物語」である。

・日課箇所は、「聖霊降臨」によって宣教活動を始めることで「教会」の世界展開の端緒を開いた使徒たちが、「エルサレム」を拠点として最初の活動を展開していたことを物語る中に置かれた、「使徒たちによる癒しと宣教の報告」の一部である。これを主導した人物として「ペトロとヨハネ」の名が挙げられている。正統教会は「ペトロ」を指導者と位置づける教会を中核にして形成されたが、それとは異なる展開をしてきた「ヨハネ」を指導者と位置づける教会をも包含した「公会教会」が構想され、実現したとされる。ここでヨハネの名が並ぶのは、そのような関係性を反映している。

福音書日課(マタイ5章より)

・日課箇所は、いわゆる「山上の説教」(5~7章)の中の一節で、主イエスが「律法」の中心とみなされる「十戒」の中からいくつかの事項を取り上げて再解釈を示されたという形式で展開する中の一部。初期の教会では、「パウロ書簡集」でも議論的となっているように、旧約正典「律法」の諸規則をどのように扱うべきなのか論争が続いていた。一部の過激な者たちは、旧約正典全体を完全に排除することも試みたが、主流の教会指導者らは、原則として自分たちの信仰の母体である「ユダヤ教」を基礎づける旧約正典をそのまま受け入れるべきものと考えた(パウロも、基本的には同様である)。ただし、ファリサイ派の人々や彼らの律法学者(ラビたち)が主張するような「ユダヤ人としての枠組みを規定するもの」としてではなく、「キリストに従う者の信仰を基礎づけるもの」として旧約正典を位置づけることを目指した。「マタイ福音書」は、そのような試みを主イエスの教えに根拠を有するものとして提示するために、主イエスが「律法」の再解釈をなされたものとして「山上の説教」をまとめている。

・38節「目には目を、歯には歯を」は、出 21:24、レビ 24:20、申 19:21に見出される同害報復法。これは、古バビロニア王国時代の「ハンムラビ法典」にも見られるように、オリエント世界で広く知られた法思想。旧約正典では、明確に神授の律法として命じられているわけではないが、当然の考え方として採用されている。しかし、主イエス(マタイ福音書)は、この報復法を否定し、非暴力無抵抗を教えている。

・43節「隣人を愛し、敵を憎め」は、レビ 19:18に見出される規定とされるが、レビ記にあるのは前半部分のみであって、後半部分「敵を憎め」は旧約正典中に見出されない付加。後半部分を申 23:4~7の解釈とみならず場合もあるが、「律法」の基本的な考えは、部外者や異邦の者を排除するのではなく、寄留者として受け入れるべきことである。これは、「出エジプトの記憶」に基づく教えであり、旧約全般を基礎づける思想。

来週の誕生日 (11月17日~23日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-12「とうときわが神よ」(= I 16)は、17-18世紀ドイツの敬虔派牧師クラッセルト(クラッセリウス)の作詞。曲は、もともと別の歌詞につけられていたが、1704年出版の敬虔派讚美歌集でクラッセルトの歌詞と組み合わせられたもので、以後、広く歌われるようになった。J.S.バッハは、クラッセルトの歌詞に自作の旋律をつけている。

・21-520「真実に清く生きたい」(= I 452)は、20世紀初めに早稲田大学で教えていた米国会衆派牧師ウォルターが母親宛に送った手紙の一節が雑誌に投稿された詞による讚美歌。曲は、メソジスト派の伝道者ピークが作詞者ウォルターに会った際に見せられた歌詞に即興で作曲したものを元に、讚美リーダーとして知られたグラント・タラーが編曲したものの。

・21-394「信仰うけつぎ」は、19世紀英国人で国教徒からカトリックに転じたフェイバーの作詞。英国教会改革の時代に弾圧を受けたカトリックの立場から歌った歌詞で、かつては英米圏で広く採用されていた(現在は各派歌集から削除されている)。曲は、19世紀ドイツ系英国カトリック信徒の教会音楽家ヘミーが、当時のカトリック復興運動の中で作曲。

21-12「とうときわが神よ」

Dir, dir, o Höchster, will ich singen

1. Dir, dir, o Höchster, will ich singen, / denn wo ist doch ein solcher Gott wie du? / Dir will ich meine Lieder bringen; / ach gib mir deines Geistes Kraft dazu, / daß ich es tu im Namen Jesu Christ, / so wie es dir durch ihn gefällig ist.
2. Zieh mich, o Vater, zu dem Sohne, / damit dein Sohn mich wieder zieh zu dir; / dein Geist in meinem Herzen wohne / und meine Sinne und Verstand regier, / daß ich den Frieden Gottes schmeck und fühl / und dir darob im Herzen sing und spiel.
3. Verleih mir, Höchster, solche Güte, / so wird gewiß mein Singen recht getan; / so klingt es schön in meinem Liede, / und ich bet dich im Geist und Wahrheit an; / so hebt dein Geist mein Herz zu dir empor, / daß ich dir Psalmen sing im höhern Chor.
4. Denn der kann mich bei dir vertreten / mit Seufzern, die ganz unaussprechlich sind; / der lehret mich recht gläubig beten, / gibt Zeugnis meinem Geist, daß ich dein Kind / und ein Miterbe Jesu Christi sei, / daher ich »Abba, lieber Vater!« schrei.
5. Was mich dein Geist selbst bitten lehret, / das ist nach deinem Willen eingerichtet / und wird gewiß von dir erhört, / weil es im Namen deines Sohns geschicht, / durch welchen ich dein Kind und Erbe bin / und nehme von dir Gnad um Gnade hin.
6. Wohl mir, daß ich dies Zeugnis habe! / Drum bin ich voller Trost und Freudigkeit / und weiß, daß alle gute Gabe, / die ich von dir verlanget jederzeit, / die gibst du und tust überschwenglich mehr, / als ich verstehe, bitte und begehr.
7. Wohl mir, ich bitt in Jesu Namen, / der mich zu deiner Rechten selbst vertritt, / in ihm ist alles Ja und Amen, / was ich von dir im Geist und Glauben bitt. / Wohl mir, Lob dir jetzt und in Ewigkeit, / daß du mir schenkest solche Seligkeit.

21-520「真実に清く生きたい」

I would Be True

1. I would be true, for there are those who trust me;
I would be pure, for there are those who care;
I would be strong, for there is much to suffer;
I would be brave, for there is much to dare,
I would be brave, for there is much to dare.
2. I would be friend of all— the foe, the friendless;
I would be giving, and forget the gift;
I would be humble, for I know my weakness;
I would look up, and laugh, and love, and lift,
I would look up, and laugh, and love, and lift.
3. I would be prayerful through each busy moment;
I would have faith to keep the path Christ trod.
I would be tuned to hear the slightest whisper;
I would be true, and keep in touch with God,
I would be true, and keep in touch with God.

21-394「信仰うけつぎ」

Faith of Our Fathers!

1. Faith of our fathers, living still / in spite of dungeon, fire, and sword.
/ Oh, how our hearts beat high with joy / when'er we hear that glorious word.

Refrain:

- Faith of our fathers, holy faith, / we will be true to thee till death.
- The martyrs, chained in prisons dark, / were still in heart and conscience free; / and blest would be their children's fate / if they, like them, should die for thee.
- Faith of our fathers! We will love / both friend and foe in all our strife; / proclaim thee too, as love knows how, / by saving word and faithful life.